

|      |  |  |  |  |
|------|--|--|--|--|
| 受験番号 |  |  |  |  |
|      |  |  |  |  |

|      |  |  |  |
|------|--|--|--|
| 座席番号 |  |  |  |
|      |  |  |  |

(試験開始の合図の後に記入)

# 成城中学校入学試験問題(第三回)

## 国語

(配点一〇〇点)

令和四年二月五日 八時五〇分 — 九時四〇分

### 注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子は全部で15ページあります。
- 3 解答には、必ず黒色えんぴつ(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 4 解答は、必ず解答用紙の指定の欄らんに記入しなさい。
- 5 問題冊子、解答用紙それぞれの指定の欄に、受験番号と座席番号を記入しなさい。
- 6 解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号などを記入してはいけません。また解答用紙の余白および裏面には、何も書いてはいけません。
- 7 文字数の指定のある問題は、句読点などの記号も一字に数えます。
- 8 問題冊子の余白は、下書きに使用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 問題冊子、解答用紙はどちらも持ち帰ってはいけません。試験終了後、必ず提出して下さい。

【一】 次の問いに答えなさい。

問1 次の——部について、漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。(ていねいにはつきりと書くこと)

① 体が**戻る**。 ② 財布を**ヒロウ**。 ③ **メンミツ**な計画を立てる。

④ **ヒョウロン**文を読む。 ⑤ **サイスン**をして服を買う。

問2 正しく敬語を用いているものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア お客様がこちらに参ります。 イ 母は着物をお召しになつていらつしやいます。

ウ 父がお札を申しております。 エ 先生が書類をご覧になる。

オ 私はご飯を召し上がりました。

問3 次の文は日本語の表現として誤っている。例にならつて誤つているところを一カ所指摘し、正しい表現に直しなさい。ただし「私の趣味は」を変えないこと。

私の趣味は、毎週日曜日に友人とドライブをします。

例：私はたまにはコーヒーを食後に飲みたがるのに、あの人はいつも食後には紅茶を飲みたがるので困る。

問4 (1)「海底」・(2)「記名」と熟語の構成が同じものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 読書      イ 花束      ウ 進退      エ 救助      オ 非常

問5 次の意味を持つ四字熟語をあとの語群の漢字を用いて答えなさい。

一つのこと集中して気を散らさないこと。

語群 心 集 音 身 一 不 千 乱

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

地球上に生命が誕生してからおよそ二億年後（いまからおおよそ二八億年前）のことでした。①シアノバクテリアがもたらした変化は、この四〇億年の生命史のなかでも最大級の事件です。そのショックは、恐竜を絶滅させた隕石の衝突と肩を並べるほど……いや、それ以上に強烈だったかもしれません。

では、シアノバクテリアはどんなことをやらかしたのか。それは「光合成」です。光エネルギーを使って水と空気中の二酸化炭素から炭水化物をつくる、あの光合成。現在の植物や藻類などにとっては、ごく日常的な生きる術です。それを最初にやったと思われるのが、シアノバクテリアでした。

それだけ聞けば、ものすごく「役に立つイノベーション」を起こした偉大な生物のように思えるでしょう。たしかに、光エネルギーを化学エネルギーに転換するというのはビックリするようなすごい仕組みです。

しかし当時の地球で暮らしていた生物たちにとって、こいつはとんでもなく兇悪な「テロリスト」でした。というのも、光合成はその過程で酸素を発生します。いまや私たちは酸素なしで生きることができないので「ありがたい、シアノバクテリア」などと感謝したくなりそうですが、当時の生物に酸素は必要ありません。それまで地球の気には酸素がほとんど含まれていませんでした。二酸化炭素で満たされた環境で暮らしている生物にとって、酸素は必要ないどころか、強力な「毒」です。

そんなものを撒き散らすシアノバクテリアが大量に発生したのですから、ほかの生物はたまりません。大いに慌てながら、「このドアホ！」

と罵りたかつたでしょう。地球上の大気に酸素という「毒ガス」が盛大に広がったことよつて、多くの生物種が絶滅してしまつたと考えられています。そんなことが起きるのですから、生物の進化が計画性や効率性と無縁であることは間違いありません。

しかし、毒まみれの環境でも破滅しないのが、生物のしたたかなところですよ。シアノバクテリアが「酸素テロ」で生物界にアホみたいな打撃を与えたかと思つたら、こんどはその毒を「うまい、うまい」と撰取して生きるアホが次々と現れました。

シアノバクテリアのせいで絶滅に追い込まれた過去の生物種から見れば、酸素を食つて生きるなんて非常識もいいところでしょう。でも、非常識だろうが前例がなかるうが、A が生き延びるのが進化の掟です。高い木の葉を食べるキリンも、親の世代から見れば「非常識」だつたでしょう。

結果的に、いまの地球上は（嫌気性生物など一部の例外を除いて）酸素がないと生きられない生物の天下になりました。つまり、毒ガスを喜んで吸い込む「非常識なアホ」の子孫たちが大繁栄を遂げたわけです。

そんなアホの子孫のひとつが、私たち人間にほかなりません。自分たちが「非常識なアホの子孫」であることは、カオスの世の中を生き延びる作戦を考える上で重要なヒントになります。

樹形図構造の秩序に縛られていて、「結果オーライ」の生き方はなかなかできません。まず目的を明らかにして、それを実現するために何が必要かを考へて計画を立て、それを着実に実行していく。それが「正しい生き方」になります。

しかし自然界はカオスなので、そのプロセスで何が起きるかはず測できません。みんなが二酸化炭素のなかで生きるのが当たり前だつたところに、突如として酸素を吐き出すシアノバクテリアが出現したりもするわけです。

そんな環境ですべてを計画的に実現しようとするのは、どう考へても無理な相談でしょう。想定外の変化に巻き込まれる可能性は常にありますから、予定どおりに物事が運ぶとは限りません。

② バブル経済の崩壊以降、日本社会のなかで金科玉条のごとく推し進められてきた「選択と集中」は、いうまでもなく生物進化のやり方と相容れませんか。それはいわば「予測と計画」のやり方です。二八億年前の地球で、二酸化炭素に満ちた大気のなかで生きていくことを前提に、その環境で役に立つイノベーションを起こそうとしているようなものでしょう。酸素で生きていくための準備など、誰もしていません。このやり方では、シアノバクテリアのような想定外の脅威が出現した瞬間に、計画が根底から崩壊します。

では、想定外の変化に備えるにはどうすればいいのか。早い話、生物の真似をしてみればよいのです。それは「選択と集中」ではなく、いわば「発散と選択」です。未来のことはわからないのだと割りきつて、効率や短期的な合理性をあまり気にせず、いろいろなことをやってみる。

そのなかで、うまくいきそうなものを、「ゆるく」選択する。あまりきつく選択して「集中」してしまうと、次の選択肢がなくなってしまう。それが「生物的」なスタイルにほかなりません。

生物の突然変異は、無目的にいろいろな形で起こります。親と異なる形質で生まれた個体は、大半が環境に適応できず死んでしまったでしょう。

でもそのなかには、たまたま親よりもよく生きられる個体があります。酸素に囲まれても生きられるような変異体は、シアノバクテリア登場以前の時代なら、すぐに死んでしまったかもしれない。ところが想定外の激変が起きた結果、その変異は生き残りに不可欠なイノベーションになりました。

ですから、いまの常識で「役に立たない」「将来性がない」ように思えるからといって、簡単に切り捨ててはいけません。何でも手広くやっておくのが、カオスな世界における生物の生き残り戦略です。

当然のことながら、この戦略は無駄が多いでしょう。山ほど失敗が発生するので、歩留まりはかなり悪くなります。効率を重んじる人たちに我慢ならないかもしれません。それはもう、まさに「アホか……」と溜め息をつきたくなるレベルの非効率です。

しかしその非効率に耐えさえすれば、「毒ガスを吸って生きる仕組み」のような大ホームラン級のイノベーションがもたらされるかもしれません。「アホ」としか思えない行動を許容することで、その可能性が出てくるのです。

**B**、環境の変化は滅多に起こるものではないので、アホばかりではいけません。現状が続くという前提の下でうまく生きていくための堅実な行動は、やはり必要です。

でも、全員をそこに「選択と集中」させるのは賢明ではない。逆説的な言い方をすれば、それは「無駄に効率のいい社会」を生んでしまいま

**C** 一〇人の村でお米をつくるようにしましょう。「選択と集中」で全員をそこに投入すると、いま必要なお米はたくさんつくれます。とくに日本人はマジメなので、いろいろな工夫をすることで、生産効率が倍増するかもしれません。その結果、同じものを二倍つくってしまうのです。でも、お米ばかりそんなには食べられない。それに、何か環境の変化が起きてお米が凶作にでもなれば、村は全滅です。

**D**、<sup>③</sup>全員で同じ仕事をするのはやめたほうがいい。効率が二倍になったのなら、お米づくりは五人に任せて、残りの五人は遊ばせておくのです。単にダラダラと怠けられたのでは困りますが、自分のやりたいことをやってもらって、たとえ役に立ちそうもないことをしていても咎めない。そのうち退屈しのぎにフラフラと村の外にでも出かけていって、お米以外に何か食べられるものを探し始める連中も出てくるかもしれ

ません。

実際、人類はそうやって「食べられるもの」を発見してきたのだと思います。「そんなもの食べるわけないだろ、やめとけ」というに從わず、アホなチャレンジをする人がいなければ、私たちはいまだにナマコを食べていないでしょう。よく「ナマコを最初に食べたやつはすごい」と言われますが、その新発見はまさにアホが放った大ホームランだったのです。

当然、そういうチャレンジのなかには失敗もたくさんあったに違いないありません。興味本位で毒キノコに手を出して酷い目に遭った人もいたはずです。でも、それはそれで「これは食べちゃいけない」という **F** を人類にもたらしめました。それに、そもそも効率を無視して無駄を許容してこそその「大ホームラン」です。

ナマコ以外にも、アホなチャレンジのおかげで私たちが食べられるようになった食材はたくさんあるでしょう。コーヒーやわさびなど、おそろくもともと生物にとって「毒」だったものです。そういうものが食べられるようになった結果、人類の食生活はじつに多様なものになりました。

多様性がもたらす恩恵は、「いろんな物が食べられると飽きないから楽しい」ということだけではありません。多様性があれば、ある食材が環境の変化で手に入らなくなっても、代わりに食べるものがいくらでもあります。

これは、まさに生物が生き残ってきたスタイルにほかなりません。生物が遺伝子のミスコピーという失敗を犯さず、四〇億年前から効率よく命を次の世代につなぎ続けていたら、地球上にはいまだに単細胞生物しかいなかったはずですよ。いや、その場合はどこかの時点で絶滅してしまい、地球は無生物の惑星になっていたでしょう（その後また生命が誕生するかもしれないませんが、それでも同じことのくり返しです）。

しかし 夥しい数の失敗があったおかげで、生物は驚くほどの多様性を得ました。ここでいう「失敗」は、遺伝子のミスコピーによる突然変異のことだけではありません。環境の変化への適応に失敗して、滅んでしまった生物種もたくさんあります。

それでも多様性があつたからこそ、生物界では誰かが必ず生き残ってきました。未来の予測ができないカオスに対応するには、たとえ効率は悪くとも、失敗や間違いを許して多様性を確保することが大事なのです。

〈酒井敏『京大的アホがなぜ必要か カオスな世界の生存戦略』（集英社新書）による〉

問1 ——— ①「シアノバクテリアがもたらした変化は、この四〇億年の生命史のなかでも最大級の事件です」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

- (1) 「シアノバクテリアがもたらした変化」とはどのようなことか。四十字以内で答えなさい。  
(2) シアノバクテリアのこの事例から生物の進化についてどのようなことがわかるか。本文中から十五字で抜き出して答えなさい。

問2 [A] にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一歩先の未来に目を向ける生物  
イ わき目も振らず努力し続ける生物  
ウ 目の前にあるものを使える生物  
エ 現実から決して目を背けない生物

問3 ——— ②「バブル経済の崩壊以降、日本社会のなかで金科玉条のごとく推し進められてきた『選択と集中』とあるが、ここでいう「選択と集中」とはどのようなことか。それを説明した一文をこれより前の本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問4 [B] [D] にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア だから                      イ たとえば                      ウ あるいは                      エ なぜなら                      オ もちろん

問5 ——— ③「全員で同じ仕事をするのはやめたほうがいい」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 皆で手分けをして情報を集めていかないと、発展した社会の中で仕事の効率を上げ続けることができそうにないから。  
イ 世の中は何が役に立つか予測がつかないものであり、いろいろな人がいると、いざというときの助けになることがあるから。  
ウ 多様性が重んじられる社会の中では、新しい内容の仕事も増え、様々な仕事に従事する人が必要になってくる可能性があるから。  
エ 全員が同じことをやるだけでは周りの集団との差をつけることができず、弱肉強食の世界で生き残るのが難しそうだから。

問6 **E**・**F** にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア E 一方的な助言 | F 実用的な知識  
イ E 典型的な見方 | F 偉大な理論  
ウ E 常識的な意見 | F 貴重な知見  
エ E 無謀な提案 | F 賢明な判断

問7 本文中の~~~~の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 『役に立つイノベーション』を起こした偉大な生物』という言葉は、シアノバクテリアに対し、酸素がないと生きられない生物の立場に立って肯定的に表現したものである。
- イ 『非常識なアホ』の子孫たちが大繁栄を遂げたわけです』の「アホ」という表現は、周囲を省みず、環境破壊を繰り返してきた生物を暗に批判したものである。
- ウ 『結果オーライ』の生き方はなかなかできません』という言葉からは、かつてのように楽観的に生きることが難しくなった現代社会に危機感を募らせている筆者の思いが読み取れる。
- エ 『無駄に効率のいい社会』』という表現には、読者の理解を深めるためにあえて矛盾する言葉を並べて、今まで誰も気づかなかった意味の関連性を印象づけようとする筆者の工夫がある。

問8 |||| 「カオスな世界における生物の生き残り戦略」とあるが、現代社会で私たち人間が生き残るためには何が必要だと筆者は述べているか。これよりあとの本文中から三十字以上三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

天から降ってきた雫は驚くほど冷たくて、胸の奥がざわついた。

「さつきまで、晴れてたのに……」

眩くと、雨がまたぼつりと俺の頬を打つ。

午前中の撮影を終え、昼休憩を取ろうと話をしていたときはあんなに晴れていたのに。巨大な入道雲が天高く積み上がり、夏の空はこんなに大きいのだと知らしめていた。北の国で生まれた俺に、東京の夏は果てしなく暑いのだと痛感させる。

なのに今、頭上に広がっているのは鈍色のどんよりとした雲だ。身の内に激しい雨と雷を宿した、不気味な雲。これは、午後の撮影は中止かな。

「来たー！」

背後からそんな叫び声が出た。「安原っ！」と名前を呼ばれ、背中を強く叩かれる。

振り返ると、大学の同級生であり、今は同じ班で実習をしている北川が、撮影用のビデオカメラに雨よけのカバーを取り付けている最中だった。あつという間に撮影できる状態にして、北川はもう一度俺の背中を叩いてくる。

今度は、さつきよりもずっと強く。痛い、と思うのと同時に、何だか北川とは仲良くできそうにないなあ、と思った。

北川とは、生きている世界が違いすぎる。同じ場所にいっても、時間の流れが違う。北川の方がずっと速くて、激しい。

「チャンス！ これ撮りたい！」

そう叫んで、北川は休憩所として使っていた東屋から飛び出していく。コンクリートの地面には、ぼつぼつと雨粒の染みができていた。次第にそれは広がっていく。天から落ちてくる雨粒も、少しずつ大きくなっていく。

「ほら、早く来いよ、主演俳優！」

監督である北川にそう言われたら、主演である俺は動かないわけにいかない。

「でも、まだみんな帰ってきてない」

ロケ地として使っている公園には今、荷物番をしている監督と主演しかいない。他のスタッフは近くのファミレスに昼食を取りに行ってしまった。

「帰ってくるのを待って、雨が止んじまったら萎えるだろ」

馬鹿か、という顔をして、北川はすでにカメラを回しているようだった。地面を打つ雨音が徐々に大きくなっていく。夏の日差しが降り注ぎ、鮮やかな木々の緑色が眩しかった公園が雨模様染まっていく様子を、カメラに映していた。

「ほら、ここ、立って」

何もない芝の上を指さした北川に言われるがまま、立ち位置につく。演技素人の俺は、監督に言われるがまま動くしかない。

「えーと……、なに、すればいいの」

突然の雨に、突然の撮影。当然、台本なんてない。どんな台詞を言えばいいのか、どんな動きをすればいいのか、何もわからない。でも、北川はそんな俺を笑い飛ばす。

「別に、何もしなくていいよ」

「はあっ？」

何それ、どういうこと？ 何もしなくていいなら、本当に棒立ちしてるからな？

③ そう口を開きかけたとき、北川に言葉を奪われた。こちらの呼吸まで乗っ取るように大きく息を吸って、言い放った。

④ 「安原の撮る映画ってさあ、つまらないんだよ」

頬を打つ雨が、一際冷たくなった。呼吸を止めて、目を見開いて、目の前でカメラを構える北川を凝視する。

「安原植人の作品はいつも『夢見る少年』みたいなんだ」

いや、少年ですらない。子供なんだ。安原の撮る作品の世界はいつも綺麗で、優しい人ばかりで。まるでサンタクロースの存在を信じてる子供みたいなんだよ。

北川が口にする度に、雨なのか汗なのかかわからないものが、額から眉を越えて目に入る。

「いやいや、世の中そんなに甘くないだろって、思わず突っ込みたくなるんだよ」

瞬きを数回繰り返して、奥歯を噛み締めた。

「お前の撮ろうとする映画って、そういうのばっかりでうんざりする」

北川が言い終えないうちに、大きく息を吸った。雨粒と、激しくなっていく雨音と、湿った熱い空気と一緒に吸い込んだ。

④ 「——うんざりしてっ！」

そんな怒鳴り声を上げたのは、生まれて初めてだったかもしれない。喉の奥が痺れて、痛みが走って、血が流れたような気がした。そこから先は、自分の口が、手足が、自分のものじゃないようだった。

お前に俺の何がわかるんだとか。何を言われたって俺は撮りたいものを撮るんだとか。そういう覚悟かくごを持って東京に来たんだとか。喉が暴れるがままに、叫んだ。きつと、凶星だったから。北川の言う通りだったから。「お前は間違っている」「お前は映画の世界じゃ生きていけない」と、言われた気がしたから。

体から出てくるものがなくなつてやつと、息ができた。肩かたを上下させて、北川を睨にらみつける。

カメラを構えたまま、彼の口元が半月状に形を変えるのがわかった。右手がすつと前に差し出され、手刀が空を切る。雨粒が飛ぶ。

「カットっ！」

その声に、俺はまた息を止めた。乱れていた呼吸が静まり、燃こえ上がつていた頭が雨に打たれて急激に冷えていく。

カメラを下ろした北川はピースサインを作つて、「一発OK!」とにこやかに笑つた。

⑤「やるじゃん、主演俳優」

北川が——こいつが、どういふつもりで俺に喧嘩けんかをふっかけてきたのか、やつと理解する。こいつの口車に自分がまんまと乗つかつてしまつたことを、思い知る。

「安原、凄まじくいい顔で怒おこつてたよ」

突然の撮影だったけど、いい絵が撮れて嬉しい。大根役者の同級生を主演にして撮る三分間のショートムービーなんて、どうなることかと思つたけど、いいものになりそうだ。

そんな顔を、北川はしている。

「いいねえ、これ。役者の中から滲にじみ出てきた魂たましいの叫び！ つて感じ。こりやあ、カンヌ狙ねらえるよ、カンヌ。来年のパルム・ドールはもらつたな」

俺をおちよくるようにそう言つて、撮れたばかりの映像を北川は嬉しそうに確認かくにんする。その顔は、いいものが撮れたという喜びに満ちあふれていた。

「安原、一緒にカンヌ行こう。僕の親父おやじは仕事で何度か行つてるんだけど、暖かくて海が綺麗で飯も美味うまくて、景色も最高だつて言つてた」

冗談じやうだんなのか本気なのか俺には判断できない台詞を吐はきながら、でも、北川は徐々に真面目な顔になつていく。いい映画を撮るためなら友人を傷つけようと構かまわないという冷徹れいてつな一面を綺麗に隠かくす。大学の入学式で、「僕の名前ね、北川賢治。よろしく」と握手あぐしゅを求めてきたときと同じ、人当たりのいい大学生の顔になる。

自分のことを「僕」と呼ぶ男は、優しく争まじいことが嫌きらいで、ちよつと幼いという印象を持っていたけれど、北川は違う。自分に能力がある

とわかっていて、それを駆使して全力でこちらにぶつかってくる。

⑥ 「謝るから、そんな怖い顔するなよ」

勝ち誇ったような顔で笑う北川に、俺は自分の体を見下ろした。俺は今、どんな顔をしているだろうか。確かに、怒りはある。でも、不思議と熱さや苦しさはない。さつき思い切り叫んだせいで、体の中の怒りのエネルギーが尽きてしまった。

もしや北川は、そこまで計算してカメラを回していたのだろうか。俺を挑発したのだろうか。ああ、何て奴だ。こんな奴が映画の大学にはいるんだ。東京には、いるんだ。

わかっている。俺はもう戻れない。前に進むしかない。映画を、撮り続けるしかできない。

「お詫びにさ、安原の作品の撮影のときは、何でも協力するからさ」

「いや、俺の分の撮影、昨日のうちに終わっただけ」

「……そうでした」

またへらへらと笑い出した北川に、俺は歩み寄る。

「安原、もしかして、殴ったりしますか？」

後頭部をかりかりと掻きながら、それでも北川は後退りをしなかった。

「殴るなら、とりあえずカメラを片付けてからにしてくださいませんか？」

駄目？ と北川が俺の顔を覗き込むように見上げてくる。北川は俺よりだいぶ背が低い。年だって、地元の大学を中退して上京してきた俺と現役入学の北川とでは、二歳の差がある。

なのに、こんなにも北川の存在を大きく感じる。

「約束な」

無性に腹立たしくなつて、悔しくなつて、北川のTシャツの襟首を掴む。もう殴られることを覚悟したのだろう。北川は歯を食いしばり、頬を強ばらせた。

「次、俺が……映画を撮るときは、何でも協力して」

オ  
数メートル先も見えない激しい雨の中、自分の声がずっと北川に届くのがわかった。雨音にかき消されることなく、溶けることなく、北川賢治の耳に入るのが。

肩から力を抜いた北川は、胸ぐらを掴まれたまま再びあの顔になる。唇を半月状に曲げて、何もかも自分の思い通りに動かしてやるという

意気込みと策略にあふれた顔に。

「OK。おあいご用だ」

大学に入学して半年もたっていない。映画撮影の経験など、まだほとんど積んでない。

なのに、どうしてこんなにも北川を頼もしいと思ってしまうのか。さっきまで仲良くなれなそうだと、確かに思っていたのに。いや、でも、わかる。北川は、自分がないものばかりを持っている。俺が持っていないものばかりで、北川という男はできている。そしてただ一つ、映画監督になりたいという夢だけを共有している。

〈額賀濤『完バケ!』(講談社)による〉

問1 ——— ①「何だか北川とは仲良くできそうにないなあ、と思った」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の

ア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア いつも時間のことばかり考えてせわしなく動きまわる北川に追い立てられているように感じたから。

イ 上京して間もない自分のことをそれとなく田舎者扱いする北川の素振りに我慢ができないと感じたから。

ウ 大雨が降ったくらいではしゃぐ幼稚な北川とはじつくりと話し合うことができそうもないと感じたから。

エ 他人のことは考えず自分のペースでものごとを進めていく北川にはついていけそうもないと感じたから。

問2 ——— ②「演技素人の俺は、監督に言われるがまま動くしかない」とあるが、この時の安原の説明として最も適当なものを次のア～

エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 指示に従いはするものの、北川の考えていることが理解できなくて戸惑っている。

イ 悪天候に加え、他のスタッフもおらず、北川を頼りに動くしかないと思死になっている。

ウ 北川の方針には納得できないが、演技素人と思われたくないので気持ちを奮い立たせている。

エ 指図されるのは不満だが、北川と今後も付き合っていくためには仕方がないとあきらめている。

問3 ——— ③「安原の撮る映画ってさあ、つまんないんだよ」とあるが、北川は安原の映画のどのようなところを「つまんない」と言っ

ているのか。「現実」という言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問4 ———— ④ 「そんな怒鳴り声を上げたのは、生まれて初めてだったかもしれない」とあるが、怒鳴り声を上げるほど感情が高ぶったのはなぜか。その理由を四十字以内で答えなさい。

問5 ———— ⑤ 「北川が———「こいつが、どういうつもりで俺に喧嘩をふっかけてきたのか、やっと理解する」とあるが、北川が「喧嘩をふっかけてきた」のはなぜか。それを説明した次の文の  ・  にあてはまる言葉をそれぞれ十字以内で答えなさい。

ことによって  を引き出して良い映画を撮ろうとしたから。

問6 ———— ⑥ 「謝るから、そんな怖い顔するなよ」とあるが、この時の北川の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 安原に謝罪する言葉とはうらはらに、良い映像が撮影できたことに対して満足している。
- イ 安原には気の毒なことをしたと、今になって自分の犯したことの重大さに気づき始めている。
- ウ 仕方がなく謝罪をするものの、これくらいのことではむきになって怒る安原にあきれている。
- エ 安原を怒らせてしまったが、これからも協力を得るために機嫌をとろうとしている。

問7 本文全体からわかる安原の内面に関する説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分勝手なことばかりしているようにも見えるが、その実いざとなると素直な一面をみせてくれる北川に魅力を感じており、しばらく友だちとして付き合っていきたいと考えている。
- イ 自分と北川とは性格が合わないところも見られるが、同じ映画の世界に生きる身として、学ぶべきところが北川には多くあることに気づき、尊敬の念を抱き始めている。
- ウ 東京に来て以来、なかなか満足いく作品が撮れずにいらだっていたが、北川とのやりとりがきっかけで良い映画を撮る方法が見つかり、前向きになっている。
- エ 北川と仲良くできるか不安を感じるものの、映画を撮るためには彼の力が必要であり、無下に扱うこともできず、なんとかうまくやっていく方法を模索しようとしている。

問8 本文中の~~~~の説明として、適当でないものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「身の内に激しい雨と雷を宿した、不気味な雲」は、後に安原と北川の間にかかる激しいやりとりを暗示している。

イ 「地面を打つ雨音が徐々に大きくなっていく」は、撮影に没頭ぼつとうしている北川の映画にかける情熱の高まりを表している。

ウ 「頬を打つ雨が、一際冷たくなった」は、北川から裏切られて孤独こどくを感じている安原の様子を表現している。

エ 「燃え上がっていた頭が雨に打たれて急激に冷えていく」からは、怒りが収まり、冷静さを取り戻していく安原の様子がうかがえる。

オ 「数メートル先も見えない激しい雨の中、自分の声がずっと北川に届くのがわかった」からは、安原の強い思いが北川に理解された様子が読み取れる。





※文字はていねいにはっきりと書くこと

【一】

問 1

|         |    |
|---------|----|
| ① 反る    | そる |
| ② ヒロウ   | 拾う |
| ③ メンミツ  | 綿密 |
| ④ ヒョウロン | 評論 |
| ⑤ サイスン  | 採寸 |

各2点

問 2

ウエ

完答②

問 3

私の趣味は

毎週日曜日に友人とドライブをします。

②

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

㉙

㉚

㉛

㉜

㉝

㉞

㉟

㊱

㊲

㊳

㊴

㊵

㊶

㊷

㊸

㊹

㊺

㊻

㊼

㊽

㊾

㊿

各2点

【二】

問 1

|        |         |
|--------|---------|
| (2)    | (1)     |
| 計画性    | 光合成     |
| や効率性   | をを行う    |
| と無縁である | こと、多くの  |
| こと     | 生物種を絶滅さ |

⑧

問 2

ウ

④

問 3

まず目的を

④

問 4

オ

④

問 5

イ

④

問 6

ウ

④

問 7

ア

④

問 8

最初

たとえ効率

④

最後

保すること

④

完答4点

【三】

問 1

エ

④

問 2

ア

④

問 3

現実が描かれていないところ。

④

問 4

|     |       |
|-----|-------|
| われ  | 自分    |
| 、   | をよく   |
| 自分  | の知らない |
| の夢  | を否定され |
| を   | た気がした |
| 否定  | から本当の |
| された | ことを言  |
| 気が  | したから  |
| した  | 。     |

⑧

問 5

|      |      |
|------|------|
| B    | A    |
| 役者   | 安原   |
| から   | をわざと |
| 出る   | 怒らせ  |
| 魂の叫び | る    |

各3点

問 6

ア

④

問 7

イ

④

問 8

イウ

各3点

/100

受験番号

|  |  |  |  |
|--|--|--|--|
|  |  |  |  |
|--|--|--|--|

座席番号

|  |  |  |  |
|--|--|--|--|
|  |  |  |  |
|--|--|--|--|